

五等分の奇跡（裏）

吉月和玖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちらでは、自分で掲載している『五等分の奇跡』の18禁部分を掲載しているように考えております。

<https://syosetu.org/novel/295468/>

なので、次の掲載まで大分空くと思われます。

ご了承をお願いいたします。

基本、オリジナルキャラとのお話なので風太郎は出さない予定です。

もしかしたら出すかも…

目次

中野 一花

一花との初めての情事

一花のご奉仕

バレンタイン

1

38

57

中野 一花

一花との初めての情事

一花を後ろから抱き寄せる。

そして、着ているワイシャツをたぐり寄せ、捲りあげる。

太股に手を這わせると、しつとりと汗ばんでいた。

「ひあ、あ……」

直接耳に聞こえてくる嬌声。

手のひらに伝わる、生々しい肌。

「カズヨシ君が、太股、さわつてる…… あ、あつ」

一花の甘い匂いを思いつ切り嗅ぎながら、少し汗ばんだ太股を触る。

「息が、かかる…… ん、あ…… カズヨシ君」

ショーツが見えるほど捲ると、羞恥でもじもじする一花。

それだけなのに、もの凄く可愛い。

「一花は相変わらず、いい匂いだよね」

二乃に次いで姉妹でオシヤレな一花。ほのかに香水の香りが漂ってくる。

「ううう…… カズヨシ君、言い方が変態っぽいよお……」

緊張しているからなのか、一花の体温が上がっていて、体の香りが、増している気がする。

「カズヨシ君と一緒にベッドで眠れると思って、準備してきたのに…… ううう」

「一花のその気持ち、嬉しいよ」

背後から頬にキスをする。

「くううん…… やつ、ぞくぞくするよおお」

「もつと、一花の香りを感じたい。強く抱きしめたくなる」

そう言って、さつきより少し強く抱きしめる。

「カズヨシ君…… んっ、抱きしめられると、胸が苦しくなるよ。でも、もつと、さ、触ってほしくなってくるよ」

「…… 僕が触れたくなるのと同じように、一花もそう思っていてくれて嬉しい」

僕の言葉を聞いて、一花の顔が羞恥に染まった。

「うん…… カズヨシ君が思うままに、私に触れて……」

実は恥ずかしがり屋の一花が、大胆な事を言うなんて、かなり勇気を振り絞ったに違いない。

「それじゃ……」

手を移動させて、ショーツに中指を這わせた。

「ん、ふああっ……………」

薄い布越しに、熱くてぷにぷにした感触が、伝わってくる。

「嫌な感じとか、しない？」

「う、うん。気持ち、いいよ…………… あ、あ…………… カズヨシ君に触られると、体、変になっ

ちやう…………… ンン」

「変って、どんな風に？」

指でグリグリ弄りながら、少し意地悪く聞いてみる。

「わ、かんな…………… い、よ…………… 体が、痺れてきて、胸が、ドキドキして…………… キス

の何倍も、気持ちいいような気がする…………… はう、あ、あああ」

こういう風に素直に答えてしまう一花も可愛いなあ。

ショーツごと肉門を摘み上げる。

「ん、あ…………… はああ、あっ」

「ごめん、痛かった？」

「大丈夫、痛くないよ…………… 今、体に電気が走ったみたいにビリって、なって…………… ん、

はあ…………… あ、ん」

てことは、気持ちいいってことだよな。

僕はシヨーツ越しの局部を、指先でなぞり上げる。

「あふ、あ、あ…… あっ…… あっ、カズヨシ君、そこ、触られると、ふわって、なっちゃう」

「ハハハ」

クリトリスの部分を、円を描くように触ると、一花は腕の中で、ビクビクした。

「あん、あつ…… あ、そこ…… んあんつ、くすぐりたいような、気持ちいいような、変な気持ちがあるよ…… あふあ、ああ…… あッ」

肌触りのいいシヨーツの割れ目を擦るように触る。

「あつ…… あ、カズヨシ君、それダメだよ…… 恥ずかしいぐらい、感じちやうから、ダメ。ふああ、そんなにしちやダメ…… あんつ、恥ずかしいところだから、弄っちゃ、やあ……」

次第に一花の身体に力が入らなくなり、僕に体重を預けてくる。

「ん、ふ…… あ、ああ…… あん、んっ」

僕は一花が敏感に感じる場所を、なぞり続けた。

「ダメ、だよ、それ…… カズヨシくん…… あ、あ、そんな、えっちなことしちや、ダメ、あふあつ」

一花は首を振るが、抵抗する様子はない。

僕が施す快感に、小刻みに震えるばかりだ。

「カズヨシ君が、こんなに、えっちなことを、するなんて…… あん、ん」

「まあね。僕も驚いてるよ」

「カズヨシ君がこんなにあつち指を動かしてくるなんて…… はううつ」

「僕は…… 彼氏として、一花を感じさせたくて、触れているから」

何か本能から来る動きだ。

触れているうちに、一花のシヨーツから愛液が染み出して、僕の指を濡らす。

「一花のここ、たくさん濡れてる」

「ううつ、やつぱり…… そうなんだ。あうう、こんなに濡れるなんて、恥ずかしいよ、

ふあ、あ…… あんんツ」

「ほら、糸を引くほど凄い」

透明な糸を指ですくって、一花に見せてみる。

「は、恥ずかしいよ…… カズヨシ君の指、汚しちやってる、ごめんね」

「謝る事じゃないよ。これは気持ちよくなると出てくるもの、なんでしょ？」

「う…… うん……」

むしろこうやって念入りにほぐさないと。

僕は一花が反応する、コリコリした部分を弄った。

「ひああつ、あ…… カズヨシ君、そこダメ、あ、あ…… ふああんつ」

太股をくつつけるように、体に力を入れる一花。

「体がふわつて飛びそうになる、あ、あんつ、カズヨシ君、怖いよ…… あ…… ひう、う…… あう」

「怖くないよ、僕がついてるから」

「この感覚、なんだろう…… あんつ、自分が、自分じやないみたいだよ」

「絶頂…… イク感覚なのかな」

「やつぱり、そうなんだ…… あ、あんんつ、ん…… ひあ、そこ、グリグリされると、イツちやう。カ、カズヨシ君…… ん、んつ、ふあう、う…… わ、私、イツちやうよ…… ん、んあああッ！」

一花の体が、びくんと強く跳ねた。

小刻みに震えながら、びくびくつとまた跳ねる。

「軽くイツちやつた？」

「はあ…… はあ……」

息を吐きながら頷く一花。

「キスより、気持ち良かった？」

「分かんないよ…… 頭が、ぼーつとして……」

「今度は、直に触ってもいい？」

「ふえ……？」

「もつと、一花のここを触りたいんだ」

「でも、汚れてるし……」

「僕の手は構わないけど、一花の下着は脱いだ方がいいかもしれないね」

僕はショーツに指をかけて、ずり下ろしていく。

一花は恥ずかしそうにしながらも、僕が脱がしやすいように、お尻を振る。

「足、上げられる？」

「うん……」

一花の協力もあり、ショーツを脱がした。

「はあ…… はああう……」

「触るよ？」

「うん…… カズヨシ君の指で、さ、触って」

露わになった、一花の裂け目に触れる。

潤った局部を指で押すと、くちゅつと音が鳴った。

「んっ、ん…… ふあ、あ…… あ、カズヨシ君、わ、私の体、敏感なままだよ……」

「一花の、あつたかいな。触ってるだけで、興奮するぐらい、気持ちいいよ」

「ひあんん、カズヨシ君の指に、直接、触られてるよお…… ひう、うう、んっ」
柔らかな入口を押し開く。

そこに指を這わせると、硬くなったクリトリスに当たった。

「んくううつ、直接は、刺激が強いよつ、やさ、優しく、して…… あふああ、あつ、ン
ン…… イツたばかりで、体がおかしいよお」

鳴き声にも似た嬌声に、僕の血液は、ますます下半身に集まっていった。

一花はよがるように体を動かし、ズボンの中でクリトリスのように硬くなった陰茎を
押し上げる。

「はあ…… はあ…… 硬いのが、背中に当たってるよ」

「一花に興奮して、硬くなってるんだ。クリトリスと、同じように」

「こんなに、硬くなるんだあ…… んっ、こ、ここで繋がるんだよね」

「それには、もう少し……」

敏感な場所や、ぬぶぬぶにぬかるんだ隠唇を弄る。

「カ、カズヨシ君、カズヨシくうんん、ん…… つく、ああつ、私、敏感だから、あ、あ
の、またすぐに、イツちやいそうなの、だから…… だから…… そんな風に、い、弄つ
ちや、らめ…… あふあ、あ、あつ…… ああん、ぐちゅぐちゅ言ってるよお」
「こんなに感じてるのにダメ？」

「だって、また、おかしくなっちゃう、カズヨシ君の指で、また……イ、イツちゃ、う……あん、んっ……ふあ、あ、ああっ」

僕はたつぷりとぬかるんだ腔に、指を挿入する。

「ふあ、あ、指が入ってくる、んあ、アア、カズヨシ君の指が、中に……んっんあっ、はあんんっ」

「キュウキュウ締め付けてくる。指が奥まで吸い込まれそうだ」

「そんな……あ、あんん、はあ……んんっ」

さすがに奥までは届きそうにないが、一花の中は、指を一本入れただけでギチギチだった。

「ん……かなりキツイな」

「キツイと、ダメかな……？」

「いや、ダメというか、狭いと繋がる時に、一花が痛い思いをするかもしれない。それが心配なんだ」

「だ、大丈夫だよ！きつと……カズヨシ君を受け入れるため、私……少し痛くても平気だよ。それに……私自身、カズヨシ君と結ばれたいと思ってるから」

頬を上気させて言われると、僕のリップドローが燃え上がってしまう。

「そうか……じゃあ、その準備をしないとね。もつと一花を感じさせれば、入りやす

くなると思う」

一花の膣に入れた指を、ゆっくり出し入れする。

「あう、っ、んっく、う……………んっ、ああっ、カズヨシ君……………カズヨシ君っ、ンンう」

ヌルついた愛液が、淫らな水音を立てて外に出てくる。

僕はその蜜をかき出すように、指を抽挿し続けた。

「たくさん濡れて解れると、多少は痛みが減るはずだから」

「あん、あんんっ……………ん、分かったよ、ふあ、ああっ……………ああんツ、確かに、す、

少しずつ慣れてきたかも、あっ」

自分の体を支えきれない一花は、ずるずると下がりながらも、必死に倒れないように

踏ん張っている。

「気持ち良すぎて、体に力が、入らなくなっちゃう……………んはあ、あ……………あっあっ、

カズヨシ君……………ん、く……………ううんっ」

ときどき包皮越しのクリトリスを撫で回すと、一花の体はビクンツと弓なりに反っ

た。

「カ、カズヨシ君、んあ、あ、あ……………私、ああっ」

秘肉を押し広げながら、膣口をいやらしく変形させてもう一本指を挿入していく。

「ああっ、太い……………い、んんんっ！」

2本でキュウキュウだな。

僕は一花が緊張しすぎないように、中でゆつくりと2本の指を搔き回した。

「もう少し、足、広げて」

一花が言われたとおりに足を上げたので、もう少し大胆に中を搔き回した。

「あああ、やだあ、いっぱい感じちやうよお、カズヨシ君……カズヨシ君……あ、

ああ、はあ、ん、んっ。カズヨシ君、あ、あッ、私……もう、ダメ」

「またイツちやう?」

「うん……私、私、またイツちやう。カズヨシ君のえつちな指で、私、あ、あつ、カ

ズヨシ君っ」

「一花……っ」

「あああん、カズヨシ君の指でイツちやう、あ、あふああ、あ……ひつ、あん、ああ

アッ! さつきより、いっぱい、あつあつああん! ん……あ、つく、う、んうううっ

!!」

一際高い嬌声と共に、一花の体が激しく痙攣した。

「はーっ、はーっ、また、イツちやった……」

また一花を絶頂させることができた。

「はあっ……はあっ……」

僕の指は、白く濁った汁で、とろとろになっていた。

「はあ…… はあ…… 気持ち、よかった…… 今度は、カズヨシ君の番だね」

「僕の？」

「私、こつちのお勉強はしつかりしてるから」

「えっと…… どんな内容かな？」

「お、男の人の…… を…… 啜えて…… その……」

さすがの一花も口に出して言うのは、恥ずかしいようだ。

「気持ち嬉しいけど、でも一花にはあまり無理をさせたくないんだ。ましてや初めてだっていうのに」

「でも……」

一花の腰が左右に動く。

「うっ……」

「とても硬くなっていて、苦しそうだよ。それに、私だってカズヨシ君を悦ばせたいよ。お、お願い…… どうか、やらせて」

上目遣いで懇願してくる一花の申し出を、断れるわけがない。

「じゃあ…… お願いしようかな」

「うん」

僕もズボンを脱ぎ、屹立したペニスを取り出す。

「……………」

一花がペニスを見つめたまま動かない。

視姦されている気分なんだが。

「ど、どうかした?」

「こういう形……………してるんだね」

「あれ、詳しいのだと思ってた」

「そ、そんな事ないよ。み、見るのは初めてだもん。竿のような物と聞いてはいたけど、この形状は、太巻きの方が近い気がする。でも、黒くないし、先端は……………赤に近いね」

「詳細に言われると、結構恥ずかしいんだが」

「はっ!ごめんね、初めて見るから、つい。さすがに、少し、緊張するね。でも、頑張らせてもらうね。すー、はー。で、では……………い、い、いくね」

逸物にずっと顔を近づけてくる。

うわ、一花の息がかかってー

ぺちん

「ひあ」

ペニスが勝手に反応して、一花の柔らかな頬を叩いてしまった。

「はい、めん」

「う、ううん……」

びっくりしつつも、少し緊張がほぐれたのか、一花の顔の強ばりがなくなった。

「暴れん坊さんは、静めなきやだね」

小さな口から舌を出して、竿にキスをする。

「ちゅ…… ちゅっ、あつたかい」

初めてなのに、一花にこんな事をさせてもいいのかと思う反面。

して欲しいという気持ちを優先させてしまう。僕って理性があんまないんだな。

一花は反り返るペニスを、ドキドキしながら見上げている。

「もっかい…… ちゅっ、ちゅ」

今度は亀頭に、キスをする。

柔らかな上下の唇に挟まれるようなキスに、初めて一花の唇に触れたときの感覚が蘇った。

桜色の唇は、柔らかいだけでなく、ぷっくりしていて、性的だったからだ。

今度は唾液を含んだ舌が、裏筋を舐め上げる。

「れる…… れるう…… ん、ちゅ、ちゅうう…… カズヨシ君の、ビクビクして
る…… その…… 気持ちいい？」

「ああ。それに、ヤバイくらい興奮してる」

「カズヨシ君……………」

一花が、僕のモノを舐めているなんて、信じられなかった。

「れる、れる…………… すごく、熱くなってきた…………… たくさん、気持ちよくなるね……………
れるれる……………」

初めは遠慮がちだった舌が、次第に大胆になり、ペニス全体に唾液を擦り付けてくる。

「んは…………… ちゅ、れろお…………… カズヨシ君の、大事なところに、キスが出来るなんて、
幸せだよ…………… ちゅ、ちゅぢゅ。こうすることが嬉しくて、イッたばかりなのに、カズ
ヨシ君に触ってもらった場所が、ジンジンする」

「一花って、えっちなのかもね」

「わかんないよ…………… でも、カズヨシ君とえっちなことをするのは、大好きな気がす
る…………… んちゅ、ちゅ、れるれる…………… んちゅ…………… んちゅっ……………」

舌に力を入れて、くびれた部分を擦ってくる。

「う…………… く……………」

性感帯を唾液でヌルヌルな舌で擦られて、思わず声が出てしまった。

「今の声…………… 気持ちよさそうだったね」

「一花が、あまりに気持ちいいことするから、声が出たんだ…………… は…………… あ……………」

「良かった、初めてで不慣れだけど、頑張るね……んちゅ……ちゅっ……」
さすがに勉強してきたというだけあって、ポイントを押さえている。普段の勉強もこれくらい身につけてほしいものだ。

初めてなのに、一花にリードを許している気が……けど、すごい気持ちいい。

「カズヨシ君の気持ちよさそうな顔を見ると、いっぱい、きゅんってなる。まるで……挿入するときに痛くならないように、体が、準備しているみたい」

「い、一花、それはエロすぎ……」

「ええ？だ、だってカズヨシ君が言ったんだよ」

僕が言うのと、一花が言うのでは、随分違う。

一花が言うのと、とてもエロかわいいのを、彼女は理解していないようだ。

「ちゅ……ちゅ、ちゅる……ペろ、ペろ……ん、カズヨシ君、ちゅっ、ちゅ……」

ペニス、一花の唾液で濡れて光っていた。

一花はときどき目を開けて、僕の反応を見て楽しんでいる。

「私の舌で、こんなに硬くなってる……んちゅ、ちゅ……れる……こういう勉強ならいいかも」

「勉強の成果が出ていて何よりだよ」

「でも、実際はやつぱり違うね。こんなに自分の体が熱くなるなんて、思いもしなかった…… はむ…… んちゅ、ちゅ…… んつちゅ、ちゅつ」

一花は睾丸の方に顔を寄せると、根本も舐めてくれた。

「全部、きれいにするね…… れろ、んちゅ、ちゅる…… れるれる…… んはあ、ん…… ちゅう」

袋の部分にも軽くキスをする。

「う、はあ……」

相手が一花だからなのかもしれないが、付け根や玉の部分を舐められるのが、こんなにいいなんて、知らなかった。

「ちゅはっ…… んつちゅ、ぢゅ…… あんっ」

頭を前後にさせて舐める一花。

顔を離すと、糸が引いていた。

そうして再び鈴口を舐めたとき、眉が動く。

「んん…… 味が付いたお汁が出てきたよ。なにかな、これは？」

ニヤリと笑みを浮かべながら一花が聞いてくる。

「分かっつて聞いてるよね？」

「え、分かんないなあ。教えてくれたら、続きをしてあげる」

「くう…… 先走りだよ。気持ちいいから、さっきの一花の愛液みたいに出てくるんだ」

「もー、最後の方は余計だよ…… けど、気持ち、いいんだね…… んちゆ、ちゆ…… ん、はぶ…… んぢゆるっ」

ぴちやぴちやと音を立てながら、感じる場所ばかりを舐められる。

やばい…… すごい、興奮する。

「一花、ちよつと口を開けてくれる?」

「?うん…… こう?」

女性器のような唇が開き、僕はその口内へ、ペニスを突っ込んだ。

「んふ、ううっ!」

「ごめん。ちよつとの間、我慢して」

僕は一花の頭を掴むと、腰を前後に動かす。

「んっ、んちゆ、ぢゆぼっ、ぢゆっ、ぢゆぼっ」

一花の口内は彼女の膣のように狭くて、喉奥まで挿れると、口がいつぱいになってしまふ。

「ん、んっ、激しい、れふっ、んちゆ、ぢゆ…… んっんっんっ、んぢゆうっ…… ぷちゅっ」

「う、うつ……く」

独りよがりな行為だとわかっていても、あまりの快感に、その行為に耽つてしまう。

「はあっ……はあっ……」

「んん……まるで、口の中が、犯されているみたいだよ、ん、んぢゆ、んぐ、ん……んぢゆ、ぢゆっ、こうやって、動けば、いいんらよね……ぢゆっ」

一花は舌を裏筋に這わせつつ、亀頭を啜えて前後に頭を動かす。

僕の独りよがりな行動を窘めるのではなく、僕を良くさせようとしてくれる一花の気持ちがありがたかった。

「大丈夫だよ、私が、動くから……ちゆ、ぢゆる、ぢゆ、ぢゆっぽ、ぢゆ……はちゆ
ぷちゆ、ぢゆ」

感じたこともない蕩けそうな快感に襲われる。

「は、ぷっ、んちゆ、ん……どんどん、大きくなつてふ……ちゆ、ぢゆ、ちゆるる」
裏筋に這わせたままの舌がチロチロ動く。

時折、尿道口の方に舌を動かして、我慢汗をかき出すようにしていた。

ペニスが窮屈な穴で、舌に蹂躪されている。

そんな感覚に、犯されているのは、もしかして僕の方じゃないかと、思えてしまう。

「ん、んくっ、ん……ちゆぽ、ぢゆっ、ぢゆるる、また、いっぱいお汁が出てきた

よ…………… ぢゆるるつ、ぢゆ、じゆるるるッ！」

「い…………… ちかあ……………」

「カズヨシ君…………… んっぢゆ、ぢゆ…………… どうか、私、ちゃんとカズヨシ君を悦ばせられてる？自分で動くより、いいかな？」

「ああ…………… イイ…………… すごい、イイ」

「じゃあ、あとは私に任せて…………… んぢゆ、んぽつ、ん…………… ぢゆ、ぢゆる…………… んっ」

「一花、本当に、初めて…………… なの？」

「初めてだよ…………… カズヨシ君を好きって心が、気持ちよくさせてるんだと、思うよ♪」

「そ、そっか…………… く、はあ…………… うう」

「うん…………… んっんく…………… んぢゆ、ちゆば、カズヨシ君、大好きだよ、ッ、ン…………… ちゆ、ちゆうう」

一花は夢中になって、口淫を続けた。

小さな唇は唾液まみれで、それがやけに卑猥に見えてしまい、僕はどんどん加熱していく。

「ん、ふ、んんっ、んぢゆ、ぢゆっ」

一花は興奮する僕の様子をペニスから感じ取っていて、淫靡に微笑みながら、容赦な

く責め立てた。

「ちゆるるっ、ぐちゅ…………… ちゅぶ、ちゅ…………… んん、カズヨシ君…………… んっ、ぢゆる、ぢゆるるるっ」

唾液まみれになっているのは、一花の口元だけでなく僕の根元も、ぬかるんだように濡れている。

僕達の体から、唾液がポタポタとベッド上に落ちた。

「んっ、ん…………… んぢゅ、ぢゅぶ、ぢゅっ、カズヨシ君の、おいしいよ…………… ぢゅ、ん、んっんっ」

飴を舐めるように、淫棒に舌を絡ませてくる。

「う…………… あ…………… こんなことまで、勉強して、たんだ、く、う……………」

「うん、一生懸命勉強したんだから。カズヨシ君に気持ちよくなってもらいたいって思ったから……………」

一花は口内だけでなく、手も竿に添えて抜き、刺激を与えてきた。

扱きは別々でも、どちらも快感で、僕は一花にされるがままになつてしまう。

「ちゅ、ぢゅ…………… ぴちゅ…………… はむ、んう、ん…………… くちゅ…………… ぢゅぢゅうう！
んっ。ぢゆるるっ、カズヨシ君の、脈打つてる…………… ぢゅ、ぢゅぐっ」

「一花…………… あっ、あ…………… ツ」

「んうっ、ん……ぢゆ、んちゅっ……ぷちゆ、ん、んっんっ、ああん……んぢゆう、あんっ」

吸い付いたままの唇が竿を扱き続けて、僕はもう、半分イキかかっていた。好きな子が、こんな事をしてくれるなんて。

しかも僕のために、勉強までしてきてくれて。

「んっぢゆ、ぢゆぢゆ……カズヨシ、君、んはあっ、ふあ、んぢゆる、っ、んぐ、ぐ……んんッ！」

「いっ……一花……っ」

一花は僕が感じる場所を執拗に責めてくる。

強弱を付けてくびれた部分を往復して、卑猥な音を立てていた。

「んうっ、んっ、んっ、ん……んあん、んっ、カズヨシ君、んあ、あ……あん、ぢゆ、んっ！えっちなお汁、全部吸っちゃうね……ちゆるっ、じゆるるっ、ぢゆ……ちゆ、じゆるるるっ！んぢゆ、ぢゆ……んじゆるっ！」

唾液ごと先汁を嚙り、喉を鳴らす。

僕の全てを吸おうとしてくれる一花の愛情が、ダイレクトに伝わってきた。

「ん、んふあ、ん……んぢゆる、ぢゆるぶっ、お口の中が、カズヨシ君の味でいっぱいだよ……はあん、ぢゆ……ぢゆ、はぶちゆ……んくっ」

一花の口内に射精したい。

その気持ちだが、一気に加速した。

僕が再び腰を動かして、一花の口腔を掻き回す。

「んぐ、んっ、ん……………ちゅぽ、ぢゅぱ、お口の中が、カズヨシ君でいっぱいいらよ、んぷっ、んっ！ぢゅ……………ああんっ、ぢゅ、ぢゅぢゅうっ」

一花の手が強弱を付けて扱っていたが、根元まで深く啜え込むので、手の位置が陰嚢に移動する。

既に唾液まみれだった陰嚢を、一花の手が撫でるように優しく愛撫した。

「ちゅ、ぢゅ……………んふう、ん、ふっ、んん、んく、ああ、んあんっ、ん、お口の中で張りつめていくのが、わかるよ。カズヨシ君の、おつきい……………んは、んんっ、んぷ、ん、ぢゅ、ぢゅぷ……………んっ……………んふう」

「一花……………僕、もう……………」

一花は僕の切羽詰まった様子を感じ取って、手と頭の速度を増していった。

「うん、キテ……………お口にいっぱい出して……………ちゅ、ぢゅう、ん、ぢゅぐっ、ぢゅうう、んぷ、ん、ぢゅぽっ、んっ、んううううっ！」

「出る……………ッ」

一花の頭をしっかり支ええると、迫り上がってきたモノを、彼女の喉奥で一気に射精し

た。

どくんっ！どくどくっ、びゆるっ、びゆるっ！

「んううっ！ん、んぶ、んうう……んっ、ん」

一花の口の中に、思いつきり出してしまった。

大量に出た精液は、一花の口からあふれ出てしまう。

それがまた、とてもいやらしかった。

「大丈夫？」

「ん、ん……んく……っ、こくん。ごちそう……さま、あふ」

「っつて、飲んじやったの？」

「はあ、はあ……だつて、カズヨシ君の精液だよ。勿体ないから、全部飲んじやった……はふ。たくさん……出たね♪」

「ごめんね……一花の口が良すぎて、いっぱい出したかも」

「どうして謝るの？私、嬉しいよ。カズヨシ君を気持ち良くさせられて、幸せだよ。だ……私の身体、ずっと熱くなったままで、もうどうすればいいか……」

「それは……一花、一つになりたい。駄目かな？」

「でも、今射精したばかりだから、すぐには……あ」

射精しても隆起したままのペニスを見て、一花は言葉を止めた。

「カ、カズヨシ君は、大丈夫みたい……………だね」

そのまま一花をベットのの上に仰向けに寝かせた。

「ううう……………恥ずかしいよ」

「かわいいよ、一花」

髪や頬にキスをする。

「ん……………んう……………」

「今更だけど、本当に、最後までしていいの？」

「うん」

「今なら、まだ止められるよ」

「部屋に来る時、覚悟はしてきたから……………カズヨシ君に私の初めてをもらってほし

い……………だから、止めるなんて、言わないで」

うつすら涙ぐむ一花に思わず慌てた。

「カズヨシ君……………大好きだよ」

「一花……………」

僕は一花の頭を撫でた。

「意外に恥ずかしがり屋の一花にそこまで言われちゃね、僕は幸せ者だよ」

「むう……………やっぱり一言余計だよ」

「ごめんって」

そこで僕は一花の鎖骨に顔を寄せた。

「一花…… ワイシャツ脱がすよ？」

ワイシャツを脱がすと、そこにはブラを着けていない乳房が、呼吸に合わせて上下している。

「ううう…… やつぱり、恥ずかしいよお」

「触つても、いい？」

「…… うん」

許可をもらった僕は、一花の乳房にそつと触れた。

「すごい…… 一花のおっぱい…… ふかふかだ」

そして、かわいらしい乳首を口に含んだ。

「ああんっ…… カズヨシ君っ…… カズヨシ君っ！」

ちゅぱっ、ちゅぷっ……

口の中で一花の乳首が硬くなっている。

それを舌先で柔らかく転がすと、一花の体がブルブルと震える。

「きやうっ…… あ…… あ…… 感じすぎて、ダメ」

一花は背中を反らせて、身悶える。

「んひやう、う…… あ、ひあ、ンああつ、やあつ、お腹もジンジンしてきたよお。あ
んつ、カズヨシ君のが欲しい…… カズヨシ君と繋がる準備、出来てるよ…… 早
く…… 早く……」

涙目でせがむ一花を見ているだけで、爆発しそうだ。

「分かった。けど、痛かったら言ってね？」

「うん……」

僕は自分の手でペニスを掴み、ぬるりとした愛液をすくい取り、竿を濡らす。

亀頭を割れ目に押し当てると、蜜液に導かれるようにペニスを挿入していった。

「あぐうう…… ツ！あつ、あああつ、くっ」

これは、想像以上に狭い…… ツ！

指2本でギチギチだっただけのことはあり、濡れているはずなのに、すんなりと入らない。

僕は小刻みに出し入れをしながら、ゆっくり押し入れていった。

「んくうう、う…… う…… ツ、あつああーっ」

一際狭いところに当たり、そこを貫くと、繋がった場所から、愛液に混ざって血が流れた。

僕が、一花の初めてを…… もらったんだ。

「一花……」

「カズヨシ……君……」

「一花の初めて、もらったよ」

「うん……カズヨシくんには捧げることが出来て、嬉しいよ……んっ、く……ん
んっ」

一花は涙目になりながらも、嬉しそうだつた。

「あまり痛みを減らせなくて、ごめんね」

「平気だよ……痛みより、幸せの方が、ずっと、ずっと、上だから……う……っ
く、うう……この痛みも、カズヨシ君と繋がらなかったら、感じるこのなかったモ
ノだよ。カズヨシ君、ありがとう」

「僕の方こそ、ありがとうね」

僕はなるべく痛がらないように、ゆっくりと、最奥まで挿入していった。

「あぐっ……カ、カズヨシ君っ」

「奥に、入ったの、わかる？」

「うん……カズヨシ君の先端が、私の奥を押し上げてるよ……んっ、く」

一花の窮屈な膣中が、一層狭くなった気がした。

「あんんっ、ん……あ……はあ、ああ……」

何度も内奥を小突く。

そうしているうちに、痛みだけだった声も、艶が混じるようになっていった。

「カズヨシ君に動かされると、段々と、痛くなくなってきたかも……」

「良かった。今日はまだ、気持ち良くなれなくても痛みが引いてくれれば、それで……」

「でも、カズヨシ君は、私の体で、いっぱい気持ち良くなってね」

「一花の体に、無茶はさせられないよ」

「ダメ。私で気持ち良くなつて。それが私にとって幸せなの。お願い…… カズヨシ君の思うように、動いて」

一花は少し腰を浮かせて、前に突き出すようなポーズを取る。

「ね…… いっぱい動いて」

言われたままに動かしてみると、動きやすかった。

しかも、更に気持ちいい。

「んはあああ、あつ…… あつ、あつ……」

僕は突きだした腰を、やや強引に引き寄せて、いやらしい肉壺を押し分けて、貫き通した。

「奥、何度も来てる…… あつあつ、んああつ」

「ふ…… んっ、 んうっ！」

「カズヨシ君の硬いのが、何度も…… ひあつ、あ、んああ…… あ、ああッ！ん、お腹の中、出し入れしてる…… あ、あ、つく」

「一花の中も、むちやくちや気持ちいい…… よ…… あ、ああつ」

「気持ちいいって言ってくれて嬉しいよ。好きな人と繋がるって、凄い…… 幸せが無限に広がっていくみたい」

「それは、僕も感じてるよ、我を忘れそうなくらい幸せで…… 一花を、壊したいくらい、愛したい」

一花は自ら両足を更に拵げた。

「いいよ…… 壊れちゃうくらい、いっぱい、えっちなことして……」

「一花……」

僕達は繋がったまま、たくさんキスをする。

「ちゅ…… ちゅ、んちゅ…… んんう、んっ、カズヨシくん…… んちゅる、ぢゅ…… んっんっ」

重なる唇はやっぱり気持ち良くて、絡み合う唾液は、甘かった。

「ん、ちゅぶ…… ん、ん…… カズヨシ君…… カズヨシ君…… ちゅ、ちゅ…… れろ、れるれる」

乳首を指で摘まみ上げるように挟むと、一花の体は小さく痙攣した。

「おっぱいは…… はぁあん、ん…… あ、あぁ」

ダメと言いたいようだが、体は敏感に反して竿を締め付けてくる。

僕は手を結合部に移動させた。

ぎつちり啜え込んで、肉竿の形に歪んでいる裂け目を、更に拡げてみる。

「んふぁ、あぁ…… あつ、拡げられちゃつてる、あ…… あんっ、カズヨシ君に丸見えだよ…… あふぁぁ」

「あぁ、ばつちり見えてる」

「ふぁ、あ…… あつ、あ…… 恥ずかしいよ、でも、体が言うこと聞いてくれな
い…… 私が欲しいのがなんなのか、本能がわかつてるみたい」

「一花……」

なんてエツチなんだ。

「ごめんね…… でも、痛みより、気持ちよきの方が、増してきて、私、私……」

「じゃあ、一緒に気持ち良くなろう」

「うん…… んっ、はぁ、あ…… あんっ、んっ」

挿挿して何度も奥をノックすると、一花の膣内もペニスを締め付けてくる。

「あぁ、あ…… やっぱり、カズヨシ君と、こうして、せつくすしてるなんて、夢みた

い」

「夢じゃないよ」

「うん…… 眠りから覚めたら夢だったなんて、困っちゃうよ」

「僕もだよ」

ピストン運動を続けると、一花が喘いだ。

「ふあ、ああ…… あんっ、ん、さつきから、体がイキそうになってる…… ん、あ、あ、さつきイッたのに…… んあ、んんっ」

「じゃあ、今度は一緒にイこう」

「カズヨシ君と……？うんっ」

いつの間にか、繋がった部分はヌルついた愛液で、スムーズに出し入れ出来るようになっていた。

僕は一花を掴み、その動きを速めていく。

「ひ、あ、あっあっ、カズヨシ君と繋がった場所から、音がたくさん出て…… あんんっ、んはあ、私、いっぱい濡れちゃってるね」

「多分、僕も先走りが出てると思う」

「じゃあ、カズヨシ君と私のが、混ざり合っちゃってるんだね…… んっ、んはあ、あ…… んんっ」

「そうだね、混ざり合っているね」

「うん……んはっ、あ……あ、ああっ、もっと……」

「ああ。もっとかき混ぜよう」

「お願い……んううっ、んっ、あ、あっ、カズヨシ君の、は、速い、あっあっあっ……ッ！」

肌を打ち付ける音が、次第に大きくなっていく。

溢れる愛液も、体液と共に弾けた。

「好き……カズヨシ君が好きだよ、好き、好きっ」

「僕も好きだ、一花……一花、一花っ」

「カズヨシ君、カズヨシ君っ！ふああっ、ああっ、あ、あっ、んああっ、あ……幸せだよお、私、あん、カズヨシくううんっ」

「一花っ」

夢中になって膣内を貫く。

膣肉の締め付けに、僕はもう果てそうだった。

一花に射精したい。

僕の思考は、その想いで塗り潰されていく。

余裕なんて、全くなかった。

情けないほど本能のままに腰を揺らして、一花の奥まで、何度も突いた。

「はあっ…… はあっ…… 一花……」

「カズヨシ君の、中に、ちようだい……」

「いいの？」

「うん、カズヨシ君の、中に欲しい。カズヨシ君の精液で満たされたいよ、お願い、んっ、あ、あっ、んはっ！あっあっ、んんんっ」

「わかった」

僕の方も、途中で抜くなんて勿体ないことは出来そうになかった。

僕は一花の体を引き寄せるようにして下半身を打ち付けて、内奥までペニスを突き立てる。

「あ、あ…… カズヨシ君っ、んはっ！あ、ああっ」

「一花、僕、また……」

「イキそうなんだね、私もだよ…… んっ、はっ。カズヨシ君、あ、あっイツちやう、また私、今度はカズヨシ君のでイツちや、あ、あ、ひああっ、んあっ、あっあっあっ……」

ん、はああううう!!」

「う…… く、ああ…… ツ」

どくんっ、どくくっ、どくくっ…… !

射精の直前に最奥まで挿入した。

「ふあ、ああ…… あふあ、あ、あんっ」

夥しい量の精子が、亀頭の先から、一花の膣内めがけて放たれていく。

「んあつ、あ、ああ…… 出てる、んふあ、カズヨシ君の精液が、中に、あんっ、ん、んうっ」

僕は繋がったまま、一花の下半身を少し上げる。

そうすることで、少しでも精液を、一花の奥に流し込んでいった。

「あつ、んあ…… う…… カズヨシ、君……」

僕は最後の一滴まで送り込むように、射精しながらも、膣内に出し入れし続ける。

一花の膣壁は、そんな僕が吐き出した精を、最奥に送り込むように動いていた。

「カズヨシ君…… んっ、ああ…… あ…… まだ、出てる…… 凄いよ…… んっ、く、はあ」

ようやく全てを射精し終わると、ペニスをゆっくり引き抜いた。

「こぼつと、一緒に精液が溢れてくる。

「んはあ…… お、お尻の穴に、熱い精液が、たれてくるよ…… あ、んはあ、あ…… あ……」

一花が処女だった証も、一緒に垂れた。

「カズヨシ君の、お布団、汚しちゃったね……」

「洗えば平気だつて」

「……血、落ちるかな……」

「あ…… あー、なるほど。まあ、大丈夫でしょ。一花は気にしないで」

「うん……」

見つめあう僕達は、そつと唇を重ねた。

ふと時計を見ると、もう日が変わって大分経過したようだ。

「…… こんなに長い時間、愛し合っていたんだね」

「ふふつ、そうだね。お互い、夢中だったから……」

「やばい。僕はますます、一花に夢中になっちゃうかも」

「わ、私も……だよ」

そうして、僕達はまたキスをする。

「ん…… ちゅ…… 誰かこんな風に愛し合うなんて、少し前までは、全然想像もし

てなかったよ…… 私、今は心も体も満たされて、とつても幸せだよ」

一花は微笑み、涙を流す。

「今まで生きてきた中で、最高に幸せな日だよ」

「僕もだ」

一花の隣に寝転がり、抱きしめ合う。僕にとつても、最高の日になった。

恋人と初めて結ばれた夜。

一生の思い出になりそうだ。

「一花」

抱きしめながら、彼女の手を握る。

「カズヨシ君……」

一花が僕の手を、優しく握り返してきた。

その手の温かさに、心の中が温かくなった。

僕が手に入れた、この幸せ。ずっと守っていこう。一花を悲しませないでいこう。

そう思いながら、そつと瞳を閉じるのだった。

一花のご奉仕

五つ子の合宿が決まった日の次の登校日。

今日も一花は仕事に行っている訳なのだが、その一花から放課後になったら中野家に来てほしいと連絡があつた。

他の姉妹は合宿という事で直江家にいるので帰ってくることはない。それを狙つての呼び出しだろうが、あまり長い時間いることは出来ないだろうな……

そんな考えで中野家の一花の部屋に案内されたのだが……

「これはヒドいな……」

「ぶうー、これでも片づけたんだよ？」

これか……なるほど、風太郎が汚部屋とよく言っていたのは納得だ。

目の前には見事に散らかっている部屋の光景が広がっている。

「はああ……それで？僕をここに呼んだのは片付けの……んっ」

「ん……ん……カズヨシ君……ちゅ……ん、ん……好き。大好き……」

片付けの手伝いのために呼んだのか、と聞こうとしたところで唇を塞がれた。

「相変わらず、一花はキス好きだね?」

「うん……カズヨシ君は?嫌い?」

「いいや。僕も一花とのキスは大好きだよ」

そう言つて今度は僕からキスをした。

「うん、ん……ちゅ……ん、ちゅ……ん……ん、カズヨシ君……」

一花の目はすでにトロンとしている。これはキスだけでは収まらないかな。

そんな風に考えていると一花の手が僕のを撫でだした。

「ふふっ、ん……硬くなつてるよ?期待してる?」

「ん……それは一花との情熱的なキスのせいだよ。一花だつて期待してるんじゃないかな?目がトロンとしてるよ?」

軽くキスをしながら伝えると恥ずかしそうに顔を下に向ける。

けれども、ズボンの上から撫でる手はそのままだ。

「ふふふ……たしかに、私の方が我慢できないかも……ねえ?今日は私からしてもいいかな?」

一花にそう聞かれたため、コクンと頷くとベッドに座るよう促された。

「これでいいのかな?」

「うん……じゃあ、カズヨシ君のことめいっぱいご奉仕してあげるね」

一花は僕の前に跪くと、服の前を開いた。

たわわな乳房が、プルンと零れ出る。

「……………っ！」

それを見ただけで、条件反射のようにピクンとペニスが反応する。

「あは…………… まだ出してないのに、ズボンの中でピクピクしてる。苦しそうだから、出してあげるね」

一花はズボンから硬くなった僕のペニスを取り出し、そして……………

ふにゆっ

「い、一花っ!？」

なんとおっぱいで挟んできた。

「お、男の人はこういうのを喜ぶって…………… 前に勉強したの。カズヨシ君は、どう？ おっぱいで挟むのは好き？」

ふにゆふにゆと挟まれるたび、ペニスが反応してしまう。

とんでもない感触と弾力だよ。

「う、うん。好きかも…………… 柔らかさが気持ちよくて、すごく興奮するよ」

柔らかくてしっとりとした膨らみが、優しく刺激してくる。

「ふふっ、私も興奮しちゃうかも…………… だって、カズヨシ君の、こんなに硬くなってる

んだもん」

一花は胸を擦り合わせながら、ゆっくりと口を開く。

「んんっ、ちゅっ、ちゅぶ……っ」

胸の谷間からはみ出た先端をぱっくりと啜えられてしまった。

「くう……っ！」

柔らかな刺激に加えて、熱いぬめりが僕を包み込む。

「ちゅばっ、ちゅっ……んっ、じゅるるっ、ちゅっ、はあん。あふ、やつぱり大きい……ちゅっ、お口がいつぱいになっちゃう、ちゅばっ、ちゅるる」

「そんなに頬張って、苦しくない？」

一花はめいっばいペニスを頬張り、少し苦しそうな表情になっていた。

「んぐっ、じゅるる……ちゅっ、ちよつとだけね……んちゅっ、ちゅば。でも、カズヨシくんのをたくさん受け入れたいから、平気だよ。ちゅるるっ、じゅぶっ、じゅるる」

乳房を押しつけるようにしながら、一花は喉深くまでペニスを飲み込む。

柔らかな乳房と喉で締め付けられて、たまらなく気持ちがいい。

「う、うう……」

「んふ、カズヨシ君声が出て……ちゅば、ちゅっ……嬉しい、んんっ。ちゅばっ、

ちゆ…… んんつ、あんんつ、カズヨシ君の熱くて、あふつ、口が蕩けるう、ちゆぼつ、ちゆぼつ」

慣れて来たのか、一花はやがて眼を細め、うっとりした表情になる。

「…… つ、そ、そんなに深くまでつ、大丈夫？」

僕が心配になるほど深く、ペニスを口内に受け入れていた。

「あは…… ムちゆつ、口に入ってるのになんだか気持ちよくなつて…… あふう、こうしてるとカズヨシ君と繋がってるみたい。じゆるるつ、ちゆつ、ちゆぶぶ…… んんつ…… あんつ、きもひいいの、じゆるる」

ねつとりと舌を絡ませながら、一花は僕へ奉仕を続けた。

「あつ、く…… つ、ぼ、ぼくも気持ちいいよ、それ、堪らないつ」

「ホント？じゃあもつとするね…… ちゆるるう、れる…… んちゆつ、ちゆぼつ、ちゆぼつ」

派手な水音を立てながら、一花は顔を上下に動かした。

胸を竿に強く押しつけ、興奮したように激しく揉みしだく。

「ちゆつ、ちゆつ、じゆるる…… あんつ、んつ、あふう…… ぴちや、ちゆるる、んちゆつ」

僕と一花の息がどんどん荒くなり、やがて激しさはピークに達した。

「く…… ううつ、イクっ!!」

「んんっ?!んくっ、んっ…… じゅるる…… あふう」

一花は突然の射精にもかかわらず、しつかりと口で受け止めてくれた。

「んくっ、んく…… ちゅるる。あふっ、味が濃い…… ちゅっ」

喉を鳴らしながら、一花が僕の精子を飲み込んでゆく。

「んっ、んっ…… はあん…… ちゅっ、カズヨシ君の精液…… 全部…… 飲んじやった♪」

少しだけ零れた白濁液が胸に掛かり、一花の妖艶さに輪が掛かっていた。

「す、すごいね…… 前も飲んでくれたよね」

「うん、たくさん出たよね。前も言っただけど、勿体ないしね。それに、全て受け止めたかったから」

頬を赤らめ、一花がもじもじと内股を擦り合わせる。

「一花、ありがとう…… 今度はこっちにきて」

「あつ、カズヨシ君…… っ」

座ったまま、一花を抱き寄せた。

「一花、僕の膝の上に座って」

「う、うん……」

一花が僕の膝の上にちよこんと僕に背中を向けて腰掛ける。

「…………… 脱がせるよ?」

「ああつ…………… やつ、やつぱり恥ずかしいよつ」

ズボンと下着を一気に引き抜くと、ぬるりとした透明な糸がしたたり落ちて来た。

「あふつ、こ、こんな濡れちゃつてる…………… あまりみないでえつ」

真つ赤な顔を手で覆つてイヤイヤをする一花。

「すぐに濡れちゃう一花も、僕は大好きだよ。僕に奉仕してくれただけでこんなになるなんて、すごく嬉しい」

指で濡れている部分を撫でるように触る。

「ああつ、カズヨシ君に言われると、う、嬉しいけど…………… あふつ。やつ! んつ、あああ
ん…………… あふう、や、やだ、すごくエツチな音がしてるよお、んんつ!」

指で軽くかき混ぜると、くちやくちやと裂け目から水音が聞こえる。

「あんつ、あつあつ…………… ダメえ、はあつ、はあ…………… 恥ずかしすぎるう」

一花が悶えて、僕の手を挟み込んでくる。

「一花が感じてくれてる音だから、恥ずかしくないよ。僕はもつと聞きたいな
指を軽く挿入すると、つるりと飲み込まれる。

「きやううつ! ああんつ、指入ってるう。あつあつ、んつ、ゴツゴツして気持ちいい

い…… ああつ」

挿入された指を一花はすぐに締め付けて来た。

本人は恥ずかしがっているのに、内部は積極的にキュウキュウ締め付けてくるのがとても可愛らしい。

「一花の中も気持ちいいよ。指に吸い付いてくるみたいだ」

指先で肉ヒダを掻きわけるように刺激してゆく。

「ふあああつ！ああんつ、はあつ、あふうう……っ！」

指をくねらせるたび、一花が甘い声を上げる。

「あんつ、んくつ！ゆ、指曲げないでえつ、くううんつ、やつやあつ、そこ感じ過ぎちゃうからあ！」

曲げた指先がポイントに当たったらしく、一花はビクビクと腰を震わせた。

「そつか、ここを感じるんだね」

一花が反応した部分を、指で優しく刺激してやる。

同時に親指を使って、肉芽もくすぐった。

「ああああんつ！ああつ、ダメえええつ、イツちやうう、い、弄られたら……やあああつ、出ちやううつ、あつ、ふあ、あああんつ、んあああつ！」

「わわっ!？」

一花の裂け目から、噴水のように飛沫が飛び散った。

「うっ、ううっ…… は、恥ずかしいっ、感じ過ぎて出ちゃった」

一花の甘酸っぱい香りが辺りに広がる。

「どうやら潮を噴いてしまったらしい。」

「気持ち良かったんだね。一花が気持ちよくなってくれれば僕も嬉しいよ…… そして興奮する」

「そそり立ったペニスを、一花の股の間から出してみせる。」

「ああん…… す、すごい、カズヨシ君ってば、またこんなに大きくなってるっ」

「うん…… 今度はこつちを一花の中に入れるね」

ペニスを一花の入り口に押し当て、腰を送り込んだ。

「はあっ、あっあっ…… あああん！んっ、熱くて硬いのが…… ふああっ」

ペニスに押し出され、一花の中から蜜が溢れ出した。

「相変わらず一花の中は狭いが、潮を噴いてしまうほど感じてくれたからか、以前よりもすんなり挿入できた。」

「あんっ、んっ、あふう…… やんっ、お腹の奥、当たって…… ああんっ」

「一花の腰を落とすと、自然と奥へとペニスが入り込む。」

「うん、一花の奥に、コリコリ当たってる。苦しくない？」

「んっ、あんっ…… ああっ、く、苦しいよりも…… んっ、ああん、感じて……
ふあああっ」

僕にしがみつきながら、一花が悶える。

「んっ、あっ、ああんっ、さっきのところにも当たってるのっ、やあっ、熱いのが擦れて
るうっ。はあんっ、んっ、ああああんっ、はあっはあ、あふっ、んんっ！」

下から軽く突くと、一花は堪らずイヤイヤをする。

「あんんっ、あっあっ、奥…… すごいっ、んんっ！くうんっ、ああんっ、ど、ど
うしよう……」

「ん？何がどうしようなの？」

喘ぎながら、一花が困惑したように漏らす。

「あんんっ、んっ！私、敏感すぎて…… はああんっ！あふっ、す、すぐにイツちやい
そうっ。んっ、あっああん、んああっ」

時々軽く達しているらしく、膣内が小刻みに震える。

「ん…… さっきイツたばかりで中が敏感になってるのかもね」

「んっ、んんっ、そうかも…… あふっ、擦れるだけで、感じちやううっ」

一花の膣内はどんどん熱く火照り、痛いほどに僕を締め付けてくる。

一花の身体ごと揺らすようにして、激しく突き上げてゆく。

「やんつ、あつあああつ！はあんつ、やあつ、カズヨシ君つ、激し…… ああああんつ
！」

「く…… ゆっくりがいい？」

「あふつ、ああんつ、いいよつ…… はあつ、激しくしてえ…… カズヨシ君つ……
あああつ。わ、私を壊して…… ああんつ、いいのおつ、全部つ、ぜんぶ、カズヨシ君
のなのつ！ああああつ、ひやあうんつ！」

「壊さないよ…… 一花を大切にする。ずっと」

「あーつ、あーつ、やああんつ、そ、そんなこと言われたら…… あああつ、し、しあ
わせで、身体が…… つ、ああああんつ！とろけちやうようつ…… ああんつ、とろ
けて、カズヨシ君のまざつちやうつ、ひやううんつ」

「いいね。一花ととけあいたいよ」

快感に僕の脳みそも溶け出してしまっそうだよ、一花。

「いっっちゃ、言っちゃ、ダメ、ダメつなの…… はあああああんつ、ああつ、ら
めえ…… らめになるう…… ひやあふうつん！あふつ、んつ、んんつ、あつ
あつ…… カズヨシ君…… はああんつ、気持ちいいの来ちやううつ！」

一花の膝がガクガクと震える。

身体に力が入っているらしく、つま先がぴんと伸びていた。

「カズヨシ君つ、はあんつ、ああつ……いいよお……ああつ、気持ちいいつ！あつあつ、イクイクつ……あああつ！」

僕の手を強く握り、一花が切羽詰まったように声を上げた。

「はあんつ、あつ、ああああん！やあつ、んつ……くううん！ふああつ、んつ、あああんつ！イクつ！あんつ、頭……真つ白になつてるう、あふうううう！」

「くううつ……僕もつ、イクつ!!」

一花をしつかり抱えたまま、僕はがむしやらに腰を動かした。

「イクつ、はああんつ、イクうつ！カズヨシ君……いっしょ、いっしょに、あんつ、あああん、一緒にイツてええええええつ！あんつ、あんつ、はあああつ、カズヨシ君つ、カズヨシくううんつ、カズヨシ君のが、いっばい！中に……はああああんつ」

僕がどくどくと精を注ぎ込むのと同時に、一花は大きく達していた。

「やつやつ、す、すごく奥……熱いよつ、ふあああつ、やあつ……んんつ！あつあんんつ、カズヨシ君のまだ硬い……はあんつ」

未だに脈を打つペニスの感覚に、一花はうつとりと眼を細める。

「びくんびくん震えて……んつ、もつとしたいって言ってるみたいだよ」

「一花……このままもつと抱いてもいいかな？」

僕が尋ねると、一花は耳まで赤くして頷く。

「うん…… 私も今、おねだりしようと思っていたの…… はふっ」

「一花のおねだりにめいっばい応えないとね」

僕は身体を起こし、一花をベッドに押し倒した。

「ああんっ、そんな、めいっばいだなんて……」

一花は嬉しそうに眼を細める。

横たわった事で、乳房がふるんと大きく揺れた。

「一花のおっぱい、美味しそうだ」

顔を近づけ、揺れ動く乳房をぺろりと舐める。

「きやつーんっ、ああああっ…… くすぐった…… んっあふうっ」

「一花から、すぐくいい匂いがする。ん……」

甘い匂いがする膨らみを、ぺろぺろと舌でくすぐる。

「ふあああっ…… ああんっ、やつ、く、くすぐりたいけど…… あんっ！」

舌が這うたび、一花はくすぐったそうに身を振った。

「けど……？」

「ゾクゾクして、感じちやう…… んっ、あつ、あああんっ」

胸の突起がぴんと尖り、ふつつつと乳輪が粟立ってゆく。

愛らしいその蕾を、ちゅうちゅうと吸ってみる。

「やああんっ、んっ、ああんっ、吸っちやダメえ…… はあんっ、んんっ！ああっ、んっ…… はあっ、あふううう！」

乳首を吸っているうちに、一花の体温が高まってゆく。

脚の間から見える裂け目はぱっくりと口を開き、僕を待ちわびているみたいだった。

「一花…… このまま繋がるよっ」

片方の脚を抱えたままで、一花の中へ剛直を突き入れる。

「えっ、こ、この体勢で？んっ…… あああっ！ふああああっ!?んあっ、やつ、ああああんっ！」

じゅぶりと大きな水音がして、一花の蜜と僕の精液が押し出されてゆく。

「はあああん…… んん！ああっ、す、すごい奥まで…… んんっ!!はあっ、んっ、あっあっ…… やあああん、こ、これ、いつもと感じが違うかも」

奥まで入れると、一花が少し苦しそうに吐息を漏らす。

「んっ、変な感じがするの？」

「う、ううん。んんっ、は、初めての角度で…… あっあっ…… ちよつとだけ、苦しいかも、んんっ」

「そっか、じゃあ少し変えてみるよ…… んんっ」

腰を動かし、わずかに挿入角度を変えてみる。

「あつ…… ああつ、そ、そこは平気かも…… んつ。ふあああ…… んつ、あああ
んつ、あんつ！」

今度は苦しくないらしく、一花の声が少し甘くなってきた。

「んつ、あああつ…… あつ、あふつ、はあんつ…… き、気持ちよくなってきたよ、
ふああつ」

「一花はここに当たるのが好きなんだね？」

一花が好きなポイントを探りつつ、再び乳首を吸ってみる。

「きやつ！あああつ！す、吸いながらは…… ふあああつ！あんつ、あつあつ、両方
されたら、んんつ、気持ちよすぎちゃうう、ああああんつ」

「ん、じゃあもつとするよ…… ちゅ」

抽挿を繰り返しながら、軽く乳首を甘噛みする。

「きやうつ！あああつ、ふあああつ！ち、乳首噛んじやダメえ…… やつ、あつ、あああ
んつ！」

ビクビクと一花が身体を震わせて、ペニスが締め付けられる。

「ごめん、痛かったかな……」

今度は甘噛みしたところを、優しく舌で転がす。

「あああん！あつ、あふううつ！はあん、やあ、ジンジンするううつ。あんつ、ああああ

んっ、そこ、敏感になつてゐるからっ、ああん、気持ちよすぎちゃう……ふあああんっ」
 ぷつくりと尖つた乳首を吸いながら、激しく挿入を繰り返す。

「きやつ、んっ、ああああん！カズヨシ君っ、激しい……ふあああ、あふう！やつつ
 ！んっ、ああああん、だめえっ、そんなにされたらっ、あふう、おかしくなつちゃうう
 ！」

一花が僕にしがみつき、またガクガクと膝を震わせる。

「ん、乱れる一花も可愛いよ、ちゅ……」

胸の谷間に流れ落ちる汗を吸いながら、裂け目を大きくかき混ぜてゆく。

「んんっ、あつ、あああん！はあはあつ……あふつ、んん！やんんっ、はあん、可愛
 いとか言われたら……キウンキウンしてきちゃう……あつあつ、あふうっ！
 くうんっ！」

蜜と精液が混ざつた物が、一花の太ももを伝わり、ベッドへ落ちてゆく。

「はあつ、んっ、ああああつ……カズヨシくうん……好き……大好
 き……」

瞳を熱く潤ませて、一花が囁く。

「……っ、僕も一花が大好きだっ！愛してる……」

自分の気持ちをつつけるように、更に彼女の奥を貫く。

「あ……愛してる……私も、私もっ！カズヨシ君、カズヨシ君……！カズヨシ君を愛してるうっ！」

「一花ッ！」

「ああああっ！う、嬉しい……んっ、あふっ、嬉しすぎてまたイツちやうよおっ！」

一花の奥がヒクヒクと震え、限界を知らせてくる。

「やあああんっ、んっ、カズヨシ君っ、愛してる……っ！」

「一花……んっ、僕も愛してる……っ」

挿挿のスピードを上げながら、そのまま僕達は絶頂へと向かう。

「あああんっ、イク……イクうう！カズヨシ君……来てっ、私の中にまた注いでえっ！」

「くうう……！！」

剛直を突き入れたまま、僕は一花の膣奥へ精液を放った。

どくんどくんと、大量の熱い物が迸る。

「ああああっ！やつ、カズヨシ君のが出てる……熱い……あああんっ」

一花の膣内に精液が全て吸われてしまっそうだ。

「はああ……イキ過ぎて……もう……おかしくなりそう……」

「ごめんね。ちよつと無理させ過ぎたかも」

ぐったりの一花の頭を撫でながら、唇にチュツとキスをした。

「あはは……大丈夫だよ……カズヨシ君が、気持ちよかったなら、ね……
んっ……ちゅっ……私も気持ちよかったよ?」

そう言いながらまた一花からもキスをされるのだった。

……

その後、部屋を片づけてからベッドに二人で寝転んでいる。

その… シーツを駄目にしてしまったのと床もビシャビシャにってしまったので、急遽洗濯とか掃除をしなくてはならなくなったのだ。

「うふふ…」

「機嫌よさそうだね一花」

「そりゃあ、こうやってカズヨシ君を独り占めできるんだもん……ごめんね、普通のデートが出来ればいいんだけど……っ」

僕はそこで一花の唇に指を付けて言葉を止めた。

「全然、そんな事思っていないよ。僕は女優として頑張ってる一花が大好きだから。それに、こうやって僕だけが見れる可愛い一花も独占できる訳だし」

「もー……えっち……」

「ふふっ。さて、そろそろ帰らないと皆から何言われるか分かったもんじゃないからね。

行こうか」

「うん！」

起き上がった僕は一花に手を差し伸べて起き上がらせる。

「よし、じゃあ行こう」

「うん。あ、あと一回だけ……ん」

そう言った一花は軽く僕の唇にキスをしてきた。

「ふふっ、やっぱりカズヨシ君とのキス大好きっ！」

屈託ない笑顔でそう言われると僕からは何も言えないな。

「あ、そうだ。一花は日の出祭来れそうなの？」

「うくん、仕事が入ってるからなあ。行けたら行くよ！カズヨシ君と回りたいしね」

「そっか……僕も一花と回りたいな」

「うんっ！」

手を繋ぎ、そんな話を交えながら中野家を後にするのだった。

バレンタイン

2月14日。

世間ではバレンタインで盛り上がっている。

僕達三年生は自主登校となっていているのだが、五月と風太郎は試験本番まで登校して勉強をするそうなので、他の姉妹や僕も二人と同様に登校することになっている。

「はい、カズ君！愛情たっぷり込めて作ったんだから」

「うん！今年は去年よりうまく作れた！」

「私もです！今年は一人で作ったんですよ！」

「あの…市販品で申し訳ないのですが、受け取っていただけると嬉しいですよ」

「皆ありがとね。家に帰ってから食べるよ。五月は受験が控えてるんだから、その気持ちだけでも嬉しいよ」

受け取ったチョコは鞆の中になりました。

「上杉は相変わらず先に行っちゃってるのね、彼女を置いて」

「あはは……そ、そういうえば、直江さんは今年も紙袋持ってきてるんですか？」

「まあね。念のため」

「紙袋？あー……なるほどね」

紙袋など何に使うのか疑問に思った二乃であったが、すぐに理解をしてくれたようだ。

「去年の量は凄かったですからね」

「教室の机の上にも大量にあった」

「皆！まずは靴箱から凄いんだから！見たらビックリするよ」

興奮したように四葉が言ってくる。そんなところに桜が近づいてきた。

「皆さん、おはようございます」

「おはようございます桜」

「なーに？朝からご機嫌ね」

「えへへ、バレンタインに自分が参加することになるとは思ってもいなかったので。はい、和義さん。チョコレート作りは初めてだったのでうまく作れたと思います。受け取っていただけると嬉しいですよ」

「へえ！初めてなんだ。ありがとう」

差し出されたチョコを受け取ると桜は嬉しそうにしている。

「それにしても周りの視線凄いな」

「あ、三玖もそう思う？去年もそうだったから」

「僕一人だったらとんでもない事になってただろうね」

一花と付き合っている事は公に出来ないから、周りからすれば僕には彼女がいない事になつてゐるからなあ。

そんな風に考えているともじもじと鞆の中を見たりしている四葉の姿が目に残まつた。

仕方ない。

自分の携帯である人物の連絡先を出すと電話を掛ける。

「あ、風太郎?」

「え?」

「今学校に着いたんだけどさ、ちよつと屋上の手前にある自販機まで来てくんない?..... いいじゃんちよつとだけだからさ..... ありがとね。じゃまた」

電話が終わったので携帯をしまう。

「あ、あのお... 直江さん...?」

「屋上の手前にある自販機。そこに今から風太郎が来るから、その鞆の中身渡してきな」

「... つ! ありがとうございます!」

勢いよく頭を下げると凄く速さで走って行ってしまった。

世話の焼ける二人だ。

「さっすがカズ君」

「ホントに。気が利いててそこに惹かれる」

「ですね」

残った姉妹の三人がニコニコと反応している。

「一花さんがここにいたら、また嫉妬されますよ?」

「そんなつもりはないんだけどね」

桜のそんな言葉にやれやれと頭を掻きながら自分も教室に向かうのだった。

「やっぱり四葉には甘いよね?」

今日は仕事を早く終わらせたと言つてうちに来ていた一花。

朝の出来事を報告するとジト目で見ながらそう伝えてきた。

「そうかな? 普通だと思っただけ?」

「まあ、兄さんは四葉にというよりも娘達全員に甘いんですけどね。それはそうと今年も多くのチョコを貰ってきましたね」

ソファアの上に置かれているチョコの入った紙袋を見ながら感想を伝えてくる零奈。

今年も風太郎が受験直後つてこともあるから毎年お願いしてることも出来なかったしなあ。どうしたものか。

「あれとは別に娘達と桜さんのがありますよね？」

「ああ、別に取つてあるよ」

「へえ。じゃあ私のはもういらないか。どうせお母さんから貰つてるんでしょ？」
「もちろんです」

包装されている箱を手にそんなことを言ってくる一花。

「いやいや、一花のは特別つていうか。恋人になつて初めてのバレンタインだし、欲しいなつて……」

「そ、そつか……えへへ……じゃあ、はい。今年もチョコ以外にしてみたんだあ」

「開けてもいい？」

「う、うん……」

手渡された箱は細長く小物的なものが入つていそうだ。

「へー、これネックレスだよね」

「うん、そう。一応ペアネックレスだよ」

一花は自分の首に下げていたネックレスを見せながらそう言つてきた。

「良いじゃん。これだつたらお互いの仕事の邪魔にならないだろうし、いつでも身に付けられるよ」

「うん！これで寂しくなかなつて……」

「ありがとう。大事にするよ」

そこで一花と見つめ合っていると。

「コホン。私がいることを忘れてないですか？」

「おっと」

「ご、ごめんねお母さん。あ、そうだ。今日泊めてくれないかな？」

「まったくいつも急なんですよ」

急なお泊りに対して零奈は呆れ気味である。

「僕は別に構わないけど。僕も零奈も明日も学校だから朝早いよ？」

「大丈夫大丈夫。私も朝から仕事で出かけるから、同じくらいに出ると思うよ」

「他の姉妹には？」

「今日は外泊だって言ってる」

メッセージを送ってある携帯画面を見せながらそう言ってくる一花。

最初から泊まる気満々である。

「こういう時は計画的なのですから…。夕飯も終わってますので、先にお風呂いただき
ますね」

「ああ。一花は零奈の次でいいよ」

「あー…。私は日本の確認とかしときたいからカズヨシ君の後でいいや」

「そう?」

という事で、急遽一花のお泊りが決定するのだった。

「ふうー、いいお湯だ」

零奈が上がった後にお風呂に入る。今日も一日呼び出しやらなんやらで忙しかったから疲れたもんなあ。

そんな風にお風呂に浸かっていると。

『カズヨシ君、入ってる?』

一花がドアの向こうから声をかけてきた。

「ああ。もう少しで上がるからまた声かけるよ」

『その必要ないよ。私も今から一緒に入っていいかな?』

「え?」

ガチャ

僕の許可など関係なくドアを開けて一糸まとわぬ姿の一花が入ってきた。

「やつほー」

「なんで!?!」

「えへへ、一緒に入りたかったからさつきはああ言ったんだ。ここのお風呂たしか広

かったから一緒に入れると思って」

本当にこういう時の計画性はいいよね。

そんなこんなで、一花は自身の体を洗い僕の前に体を入れる形で湯船に入ってきた。

「はあー… 気持ちいいね」

「そ、そうだね」

「あれー？もしかして緊張してる？」

「当たり前でしょ。一緒にお風呂に入るのなんて初めてなんだし」

「あはは… まあ、私もちよつと緊張はしてるんだけどね。ふう… … 本当に気持ちいいな。やっぱりカズヨシ君と一緒にだからかなあ」

僕へともたれ掛かりながら、もぞもぞとお尻を動かし始める。

「ちよつ、動かないで」

「え？どうし… …」

そこまで言つて、一花は驚いたように言葉を飲み込んだ。

「あれ、これ… …」

一花が恐る恐る視線をお湯の中に落としていく。

「… …」

気まずい。

いや、何度かえっちはしてるし、そういう意味では隠すようなことじゃないけど。

「ほ、ほら…… 僕だって男なんだし、二人で肌が触れ合っていればね……」

「そ、そうなんだ…… あはは……」

だんだんと言葉が勢いを失っていく。

「…… 僕、出ようか？」

「だ、だめっ！カズヨシ君と一緒にがいいの！」

「…… はい」

一花の勢いに押され、僕は引き下がった。

「……」

まあ、しばらくすれば収まる…… よね？

僕達はお互いに気にしないようにしながら、湯船に体を沈める。

「んー」

一花は両手を組むと、軽く伸びをする。

「…… お風呂、気持ちいいね」

「やっぱ、二人一緒だと狭くない？」

そのせいで、股間のアレがソレな感じになって、一花にバレただけだ。

「もう、なに言ってるの。二人で入ることに意味があるんだよ」

「…… まあ、一花が気にしないなら別にいいんだけど」

「うん、気にしてないから。だいじょーぶ」

そう言うのと、一花は脱力して、完全に僕に体を預けてくる。

「ふああ……」

一花は気持ちよさそうに目をつぶり、小さく息を吐く。

すぐくりラックスしているというか、安心しているというか……

「こうしていると、なんだか落ち着くね……」

……僕は落ち着かないんだけどね。

「こやって落ち着けるのはね、大好きなカズヨシ君と一緒にいるからだだよやっぱり」

「一花……」

一花の気持ち嬉しくて、愛おしくて、気付けば一花を抱きしめる。

「ん……」

「僕も一花のこと好きだよ」

「えへへ…… ありがとう」

一花は僕の腕にそっと手を重ねてくる。

「今…… 私、幸せだよ。カズヨシ君と、こうして…… あ、あれ…… また……」

うそ……」

一花が無言でお尻を左右に動かす。

「う、あ…… ちょよ、ちょつと一花動かないで」

擦れて気持ちよくなつてしまう。

「あ、あのさ…… さつきからずつと大きいまま、だよね？」

「…… そうだね」

「その…… カズヨシ君、もしかして…… したくなつちやつた？」

顔を赤くしながら、一花が聞いてくる。

「…… 一花のこと可愛いなーと思つてたら、その…… 小さくならなくて」

一花と二人で風呂に入つて、その上…… 肌が触れ合っているんだ。

落ち着かせる、という方が無理だ。

「そ、そんなんだ…… ふーん……」

ちよつと考えた後、一花はいたずらっぽく微笑う。

「ね、カズヨシ君。じゃあ、こういうことしたら、気持ちいい？」

僕のモノがお尻の割れ目で擦れるように、軽く腰を揺すり出した。

「う…… い、一花……？」

「あ…… すごい…… また、すごく硬くなつてる……」

お湯の中だからか、動きはゆつくりだ。

けれども、一花が自分から腰を動かし、僕のモノを擦っている。そう考えると、鼓動が早まり、よりしつそう興奮してしまう。

「ん、ん、ふ……は……お尻だと、むずかしいね……。こっちのほうが、いいかな……？」

独り言のように呟くと、一花は股の間にペニスを挟み込んだ。

「ふふ……変な感じ。私におちんちんが生えたみたい」

自分の股間から顔を出している僕のモノを、指で軽く撫でまわす。

「う、あ……」

「カズヨシ君……気持ちよさそう……」

うっとりした顔をして、一花はさらに僕を責めてくる。

太ももの間で竿を挟み込み。カ리를指でくすぐる。

腰を上下させると、秘裂を押しつけながら、僕のモノを擦る。

「ん、ん……は、ん……カズヨシ君……私、なんだか……えつちな気分になつてきちゃった……」

頬を染め、目を潤ませ、一花が僕の方に振り返る。

「……僕も、同じかも」

今は一花がほしくてしかたない。

「……………ん、いいよ。カズヨシ君……………えっち、しよ」

そう言うと、一花は軽く腰を上げると、割れ目に先端を押しつけてくる。

「でも、零奈にバレるかも」

「おちんちんを、こんな硬くしてるのにな？」

「それは……………まあ、そうだね」

「いいんじゃないかな。お互いにそうしたいんだし。それに……………お風呂でつて、どんな感じか、ちよつと興味あるし」

くすくすと笑いながら、一花が腰を動かして位置を調整する。

「……………ん、う……………お湯の中だから……………ちよつと、入れにくいかも……………」

そう言いながら、一花は自分から秘所を左右に開き。膣口に龟头をあてがうと、ゆっくり腰を下ろしてくる。

「あ、ん……………カズヨシ君の……………入ってくる……………んんっ」

先端が中に入ると、感じていた水の抵抗がなくなる。

そのまま腰を軽く突き上げると、僕のモノは一花の体の奥へと入っていく。

「あ、ん……………は、ん……………カズヨシ君の……………入ってる……………あ、あつ、ん、あ……………ふ……………」

艶を含んだ吐息と共に一花が眩く。

「う、あ……一花の中、すごく熱い……」

一花の中は、お湯の中でもはつきり分かるくらいに濡れ、熱くなっていた。

「ん、あ、ふ……だつて、カズヨシ君とえっちしてるんだもん……当たり前だよ。

カズヨシ君だつて……おちんちん、また……おつきくなってるみたいだよ？」

「そりゃ……一花にここまでされて、我慢できるわけないでしょ」

「えへ。我慢できないくらい、私つてば魅力的なんだ？」

からかうように聞いてくる。

「そうじゃなきや、こんなふうにならないよ。一花は魅力的な女の子だよ」

「あ……」

一花の顔が一気に真っ赤になる。

「カ、カズヨシ君つてば、たまに……そういう恥ずかしいこと、真顔で言うよね」

「照れるくらいなら、そんなこと聞かなければいいのに」

「うう……い、いいの。恥ずかしいけど……嬉しいし」

「まったく、恥ずかしいこといつてるのはどっちなんだか」

僕は、細く白い肩やうなじに何度もキスを繰り返す。

「んっ、あ……くすぐりたいよ、カズヨシ君……あ、ん……」

「じゃあ、こつちも一緒に……」

繋がった状態で、腰を上下させる。

最初は小さく揺らいでいただけの水面が、すぐに大きな波で乱れうねる。

「んっ、んっ、あ、ふ……んんっ、あ、ああ……！」

「……ちよつと動き難いな」

水の中は思つたよりも抵抗がある。

「はあ、はあ……それじゃ、わたしも……いつしよに……する、から……」

そう言うのと一花が自分から腰を揺すりだす。

水面がさらに波立ち、ちやぶちやぶと音を奏でる。

「んっ、あつ、んんっ、カズヨシ君……あ、あふっ、いいよ……気持ちいい……

いいの……」

「うん……僕も、気持ちいい……！」

「ん、あつ、もつと、もつと擦つてえ……」

「わかった」

一花に求められるまま、僕はさらに腰の動きを早める。

突き上げ、擦り、円を描くように動かす。

膣壁を力りがひつかくたびに生まれる熱い刺激が、そのまま快感へとかわっていく。

「あつ、あつ、ああつ、お腹の中……熱いの……んんっ。はあ、はあ……あ!?

んんっ！や、そんな…… カズヨシ君、ちよつとま…… あ、ああ…… んっああ！」
一花が大きく喘ぐ。

自分から体をくねらせ、息を乱している。

…… あれ、もしかして……

一花の腰に手を当て、体を固定し、こつこつと体の奥を何度も叩くように深く突き上げる。

「あつ、あつ、だめ、そんな……されたら…… 私、もう…… もう…… あ、ああつ、んっ、あああつ！」

頭を左右に振り、甘い声をひっきり無しにあげる。

「んあつー！や、いつ、いくつ……！ふあああつ!!」

びくびくつと、体を震わせると、くたりと脱力する。

「はあつ、はあつ、はっ、はあ、はあ、あ、ん……」

細い肩を上下させ、荒い呼吸をくり返す。

もしかして……

「あ、ま、まって…… 私、イッたから…… 少し、待って……」

「イッたんだ？」

「はあ、はあ、ん…… うん、だから……」

「……………」

湯船の中、再び腰を動かし始める。

「ふやつ!?や、あ、んっ、カズヨシ君、イッた…………… イッたの、だから…………… んっ、んっ、だめ…………… 動いちや、だめ…………… あ、あつ、待つて…………… んんっ、んああつ!!カズヨシ君、いじわる…………… だよお…………… あ、ああつ、だめ…………… なのにい……………」

「じゃあ…………… やめる?」

一花の体を抱きしめ、耳たぶを甘く噛む。

「…………… ずるいよ…………… カズヨシ君、わかってるくせに……………」

切なげな吐息をこぼし、一花は自分から腰をゆっくり動かし始めた。

「あ、ん…………… ふ…………… あ、あ…………… んくっ、んあ…………… ーい…………… しいっ、カズ

ヨシ君…………… 気持ちいい…………… また、私…………… いいの…………… あ、ああ…………… ー!」

絶頂の余韻もあつたのか、一花はたちまち快感に蕩けていく。

「はあ、はあつ、んっ、あ…………… カズヨシ君、どうしょ…………… 気持ちいいの…………… とまらない…………… あ、ああつ」

「もつと感じてるところを…………… 一花のえつちな声、聴かせてほしい」

言いながら、胸に手を這わせると、おっぱいを優しく撫でまわし、軽くこねまわす。

「あ…………… んんっ。あ、や、カズヨシ君…………… そんなにしたら、動けない…………… あ、あ

ふっ」

柔らかな感触を楽しみながら、一花の胸を愛撫し続ける。

「おっぱい、ばつかりい…………カズヨシ君、も…………そんなにされたら…………ん、

あ…………だめ…………だつてばあ…………あ、ああつ」

抗議にかまわずぷっくり膨らんでいる乳首をきゅつとつまむ。

「ふああつ!？」

また、軽くイッたのかもしれない。

焦点が甘くなった目が空を泳ぐ。

快感に蕩けた表情を浮かべる一花の口の端から、つうつと涎がこぼれる。

「このまま、続けるね？」

「あ…………ん、あ…………カズヨシくん…………また、わたし…………今…………んっ、

あ、ふ…………」

体に力が入らないのか、軽く腰をよじるだけだ。

僕は、さらに一花を感じさせるために、乳首を刺激しながら、腰を前後に動かす。

「んああつ!あ、ああつ、だめ、カズヨシ君…………こんな、何度も…………あ、私、おか

ひくなる…………んんっ。ふあああつ!あーっ、あ、ああ…………い、いっっちゃう…………

あ、また…………カズヨシ君…………また…………私、私…………!」

胸を揉みながら、耳たぶを甘く噛む。

そうしながら、奥のほうを何度も突き上げ、時々膣壁を擦るように一気にモノを引き抜く。

「ひうつ!? んっ、んっあ、あふっ、あ、んっ、きもちい…………… いいよ…………… カズヨシくうん…………… あ、あああ…………… ! あ、ああっ、だめ…………… また、いく…………… いっちやう…………… あ、あっ、ああっ」

「いいよ。イツて」

胸を揉む手の動きにも変化をつけ、前後の動きをより激しくする。

「あ、や…………… カズヨシ君、これ以上されたら、私……………」

「されたら?」

きゅっ、きゅっつと、リズムを付けて、左右の乳首を同時に刺激する。

「ふあああっ! あ、あっ、も、や…………… やらあ…………… また、いく…………… いっちや……………」

わらし…………… わたし、んっ、んんっ」

「いいよ…………… 一花、イツていいから」

ごりごりとカリが膣壁を擦るたび、一花が腰を震わせ、体をくねらせる。

深くつながり、先端で子宮口を突き上げ、ぐりぐりと擦る。

「んくうつ! あ、ああ…………… や、おちんちん、そんなに、こすったら…………… らめっ、だ、

めえ…… あ、ああ…… !はあ、はあ…… わたし、らけ…… や、なのお……

一緒…… カズヨシ君もいっしょ…… いっしょがいい……」

「一花……」

「だから…… カズヨシ君…… おねがい…… あ、ああ…… いっしょ、私
と…… んんっ」

「…… わかった。一緒にイこう」

一花の中をさらに激しくかき混ぜる。

湯船が大きく波立ち、ちやぶちやぶと音を奏でる。

「う、く……」

収縮する膣内の感触に、ぞくぞくした刺激が走る。

僕も…… イキそうだ。

「一花…… 僕も、そろそろ……」

「ん、あ…… あ、ああ…… い、いく…… いく…… カズヨシ君…… !」

がくがくと全身が震える。

一花がのけぞり、足を伸ばす。

そろそろ…… だな。

「く…… あ、一花…… 僕も、もう…… あと少し、我慢して…… !」

僕自身、快感の限界がすぐそこまで来ている。

ぎゅうぎゅうに締め付けてくる膣内を、激しく行き来させる。

「んあああつ！はああ．．．．． ああ、あ．．．．． がまん．．．．． も、できな．．．．． いく、いく．．．．． 気持ちい．．．．． カズヨシ君．．．．． カズヨシ君．．．．． あ、もう、もう．．．．．

むりい．．．．． 私、私．．．．． ！」

僕も、もう．．．．． ！」

「一花、このまま．．．．． 全部、中に．．．．． ！」

「いいよつ、出して．．．．． カズヨシ君の、全部．．．．． わたしの中に．．．．． いっぱいに、出してえ！」

「う、あ．．．．． 一花、一花．．．．． ！」

水面が激しく揺れ動く。

じゃばじゃばと音を立て、僕達はただ絶頂へと向かって駆け上っていく。

「あつ、あつ、あ、あつ、い、いいつ、気持ちいつ、カズヨシ君、わた、私も、いく、いっちゃ．．．．． あ、あああつ！」

一花の全身に震えが走る。

「く．．．．． う、あ．．．．． ！」

一花の体をぎゅつと抱きしめる。

そのまま、一番深い場所を、こつんつと突き上げた。

「んううっ!？」

一花は体がこわばり、顎をのけぞらす。そして……

「ふあああああああああああああああつ!!」

大きな声を上げ、一花が絶頂する。

膣が収縮し、ペニスを痛いほど締め付けられて、僕もまた、限界に達した。

「う、くうううっ!」

一花の体内を、白濁が満たしていく。

「あ、あつ、あつ、出てる……カズヨシ君の、おちんちん、びくびくって……あ、

ああ……ふ……はあ、はあつ、はあ……あ、ああ……カズヨシくう

ん……」

ずるずると湯船に沈んでいく一花の体を慌てて支える。

「……大丈夫?」

「ん……へーき……らよ……だいじょうぶ……らからあ……」

快感の余韻に浸っているのか、ろれつが回っていない。

「……いつまでも浸かっていると、のぼせるかもしれないね。出ようか」

「ん……って、あ、れ……? おかしいな……体に……力がはいらな

い……………」

立ち上がるうとしていた一花がバランスを崩し、僕に寄りかかるように体を預けると、そのまま倒れそうになる。

「と……………い、一花っ!?!」

「ごめ……………カズヨシ君……………足、かくかくして……………立てない、みたい……………」

その後、ぐったりした一花を抱きかかえて、湯船から出ることになった。

「はううう……………カズヨシ君、激しすぎるよお……………」

「い、一花だって、そうでしょ……………」

湯船に浸かったまま頑張ったせいとか、少しのぼせてしまったかもしれない。

僕も一花も、グツタリしたまま荒い息をつく。

「お風呂入ったのに、また汗かいちゃった……………」

「そうだね……………また体を洗わないと」

「……………どうせだし、洗いっこしよっか?」

頬を上気させながら、上目遣いで見つめてくる。

「まあ、どうせ一緒にシャワーするわけだしね」

「うん♪」

……………

再び体を洗い終わった後、客間に布団の用意をしていたのだが結局一花は僕のベッドで寝ている。

なんか用意するのが意味ないように思えてきたなあ。

とはいえ、零奈には今のところバレてはいないようではあるので客間の用意は今後もしなきゃだよな。

「どうかした？」

何か考え事をしていていると思ったのか隣の一花が聞いてきた。

そんな一花の姿は、パンツ一枚にワイシャツといつもの軽装備である。『どうせ朝には脱いでるからいいよ』、が一花談である。

「いや、一花が泊まる度に僕のところまで寝てたら客間の布団意味ないなと」

「カズヨシ君は私と一緒に寝るのは嫌？」

「そうじゃないよ。ふと思ったただけだから。それに零奈もいるわけだから建前上用意はしとかないと」

一花の頭を撫でてあげながらそう伝えると、笑顔で僕の腕にしがみついてきた。

「こうやってカズヨシ君と一緒に寝た次の日は調子がいいんだ。だから、たまに一緒に寝るのは必要なことなんだよ」

「そっか・・・」

チュツ

一花の額にキスをして眠りにつく。

おやすみ一花。また明日から頑張ろうね。

「二人とも行くよー」

「はーい」

次の日の朝。玄関で二人が来るのを待っている。

「それにしても、うちに泊まった時はやけにスッキリしてますね一花」

「そ…：そうかなあ。カズヨシ君の夕飯に朝食が食べれるからなのかも」

「そうですか。まあ良いでしょう」

そう言いながら零奈が先頭に立って通学路を進む。

そんな零奈を見てお互いに苦笑いの顔を見合せ手を繋ぐ。

ほんの少しの間ではあるが、幸せを感じる時間でもあった。